

# オンラインサイトを活用した授業実践交流の可能性

## —授業実践動画交流サイト「授業ラボおかやま」の取組を通して—

岡山県総合教育センター 近藤広理

本研究は、授業実践動画交流サイト「授業ラボおかやま」を活用した教職員等の学びについて整理、分析し、オンライン上での教職員等の学びの可能性を検討することを目的としたものである。研究の中で、授業実践動画投稿者、コメント投稿者の双方にとって、自己の実践の振り返りの機会や授業実践のための具体的なヒントなどの学びがあることがうかがわれた。また、授業実践動画投稿者にとっては、「授業ラボおかやま」という特別な場での学びが、日々の意欲的な実践へつながっていくことが示唆された。さらに、コメント投稿者にとっては、授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりする学びがあることがうかがわれた。

### 研究の概要

#### キーワード

教職員研修、オンライン、非同期、授業、動画

#### 1. 研究の背景

近年、教職員の年齢構成が若年層に大きく偏るなど、学校現場を取り巻く基盤となる環境が大きく変化している。そのような中、教職員研修の重要性がますます高まっていることは明らかであり、日本全国、多くの都道府県で喫緊の課題となっていることであろう。

令和3年には、中央教育審議会(2021)『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』が出され、「令和の日本型学校教育」の観点から、教職生涯を通じて探究心を持ち学び続ける教職員の姿が強調された。続いて、令和4年には、中央教育審議会(2022)『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)』において、「主体的・対話的で深い学び」は教師の学びにも求められるものであることが明示されたところである。

このような情勢の中、岡山県総合教育センターや県内の各地区においては、研修観の転換を図りつつ、創意工夫ある研修を模索し続けている。その一つとして、毎年、授業公開を伴う研修会が岡山県内のさまざまな場所で開催されている。しかしながら、参加者の人数や協議時間が、どうしても物理的に限られてしまうという問題が発生している。

そこで、岡山県総合教育センターでは、令和7年に、時間と場所の制約を超えた、教職員にとっての新たな学びの場として、「授業実践動画交流サイト(授業ラボおかやま)」(以下、「授業ラボおかやま」と呼ぶ。)の運用を開始した。「授業ラボおかやま」は、各地区の教科部会で実施した公開授業のほか、校内研修での公開授業、個人の日々の実践など、全ての校種、教科について投稿可能である。また、投稿する動画も、一単位時間全てを見せる必要はなく、例えば、導入の様子やグループ協議の様子など、投稿者が意見をもらいたい部分のみを投稿する仕組みとしている(資料1)。

オンライン上での教職員の学びの場としては、イギリスにおける「IRIS Connect」や、鈴木ら(2006)

が開発した「eLESSER」、宮崎県教育研修センターにおける「チャレンジICT」など、いくつかの事例がある。特に、宮崎県教育研修センターの取組は、我々にとって大変よい刺激となっており、感謝申し上げたい。

岡山県総合教育センターでは、これまでも、参考となるような授業実践の動画をオンデマンド配信することは行っていたが、誰でも動画投稿ができ、投稿した授業実践に対して意見をもらえる仕組みは、初めての試みであった。「岡山県の教職員や指導主事が、市町村の枠を超え、相互に学び合う教職員文化を創りたい」というのが、根底にある願いである。

「授業ラボおかやま」の企画・立案を行っていたほぼ同時期に出された、独立行政法人教職員支援機構（2024）の中では、「教育センター、NITS、学校、教科研究会、大学などの教職員研修は、実践、実践の省察、自己研鑽を繰り返す教職生活の中に位置づき、『探究心を持ちつつ自律的に学ぶ』教職員の力量形成・深化の過程が、より豊かなものになるよう、支援するもの」（2頁）という考え方が示された。「授業ラボおかやま」は、まさに、この考え方につながる直接的な仕組みと言えよう。

さらに、高井良（2019）は、アメリカの哲学者ドナルド・ショーン（Donald A. Schön, 1930-1997）が提唱した理論にも触れながら、「教育実践が終わった後の振り返り、すなわち、教育実践に対する省察は、教師の学びがもっとも深まる時間である。」（135頁）と考えを述べており、「授業ラボおかやま」は、この考えからも価値あるものと言える。

では、実際に、「授業ラボおかやま」を活用した教職員は、どのような学びを得たのであろうか。「授業ラボおかやま」では、通常の研修のような振り返りの提出が行われなかったため、意図的に教職員の学びを整理することは重要であり、「授業ラボおかやま」を含めた、今後の教職員研修の参考ともなるはずである。そこで、本稿では、「授業ラボおかやま」を活用した教職員の学びについて整理し、オンライン上での教職員の学びの可能性を検討したい。

なお、授業実践動画交流サイト「授業ラボおかやま」の設計自体について検討することは、本稿の目的ではないため、これ以上の詳細な説明は割愛する。資料1等を参考にいただければ幸いである。

## 2. 研究の目的

「授業ラボおかやま」を活用した教職員の学びについて整理、分析し、オンライン上での教職員の学びの可能性を検討する。

## 3. 研究の方法

### （1）調査対象

「授業ラボおかやま」に授業実践動画を投稿した教職員9人（小学校：6人、中学校：2人、高等学校：1人）及び「授業ラボおかやま」に掲載された動画に対しコメントを投稿した教職員・指導主事47人（各動画にコメント投稿した延べ人数であり、同一人物を含む。）

### （2）調査時期

令和7年9月10日（水）から令和7年10月7日（火）の任意の日

### （3）調査手段

オンラインでのアンケート

### （4）調査内容

- ① 授業ラボの活用は、自己の授業実践のために役に立ったと思う。最も当てはまるものの一つ選択してください。（「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の4件法）

② どんな点で役に立ったか当てはまるものを全て選択してください。(複数選択可)

- ・授業に関する具体的なヒント（発問や板書、声のかけ方など）を知ることができた
- ・授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりした
- ・自己の実践を振り返るきっかけになった
- ・今後の自己の実践の励み（意欲）につながった
- ・他者から学ぶ力を鍛えることにつながった
- ・動画の投稿や視聴をきっかけに、他の教職員と授業実践について直接話す機会を得た
- ・その他
- ・役に立つことがなかった

#### (5) 倫理的配慮

調査に際して、アンケート結果は、「授業ラボおかやま」の改善及び教職員研修の研究のみに活用することを伝えるとともに、データの処理は、個人名と切り離して行うことで倫理面への配慮を行った。

## 4. 結果と分析

### (1) 授業実践動画投稿者の学び

まず、自己の授業実践を撮影し、「授業ラボおかやま」に実際に投稿を行った教職員について分析を行う。調査内容「授業ラボの活用は、自己の授業実践のために役に立ったと思う。最も当てはまるものを一つ選択してください。」について結果を集計したものが、図1である。

図1によると、投稿者全員が肯定に回答し、最も高い「とても当てはまる」を選択した教職員だけを見ても約7割となっていた。このことについて、正確二項検定（両側検定）による検証を行ったところ、「 $p=.004$ 」という結果を得た。有意水準（5%）を大きく下回っていることから、肯定的回答への偏りに有意な傾向があると見るができる。このことから、実践動画の投稿やコメントをもらうことが、自己の授業実践力向上のために役立った様子が確認された。

では、今回の動画投稿者は、具体的にはどんな点で役に立ったと感じているのだろうか。調査内容「どんな点で役に立ったか」について質問し集計したものが、図2である。今回の動画投稿者に限って言えば、選択肢「その他」も含め全ての選択肢が選ばれていることから、動画投稿者それぞれにとって多様な学びがあったことが想像される。その中でも、最も多くの教職員から選択されたものが、選択肢「自己の実践を振り返るきっかけになった」と「今後の自己の実践の励み（意欲）につながっ

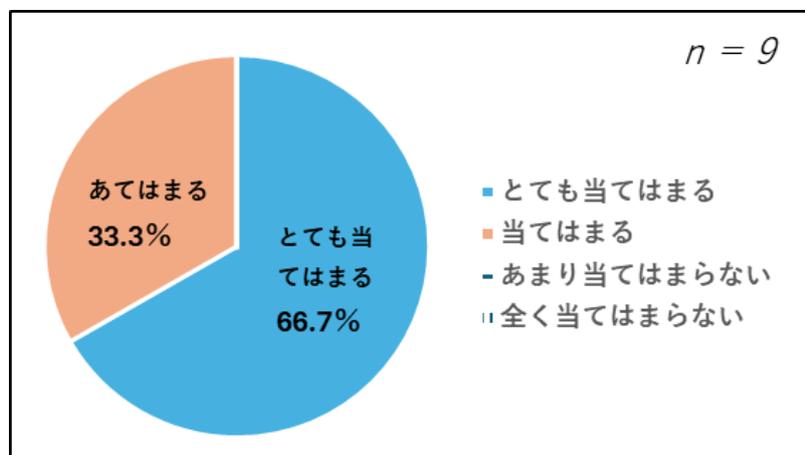


図1 自己の授業実践のために役に立ったか（動画投稿者）

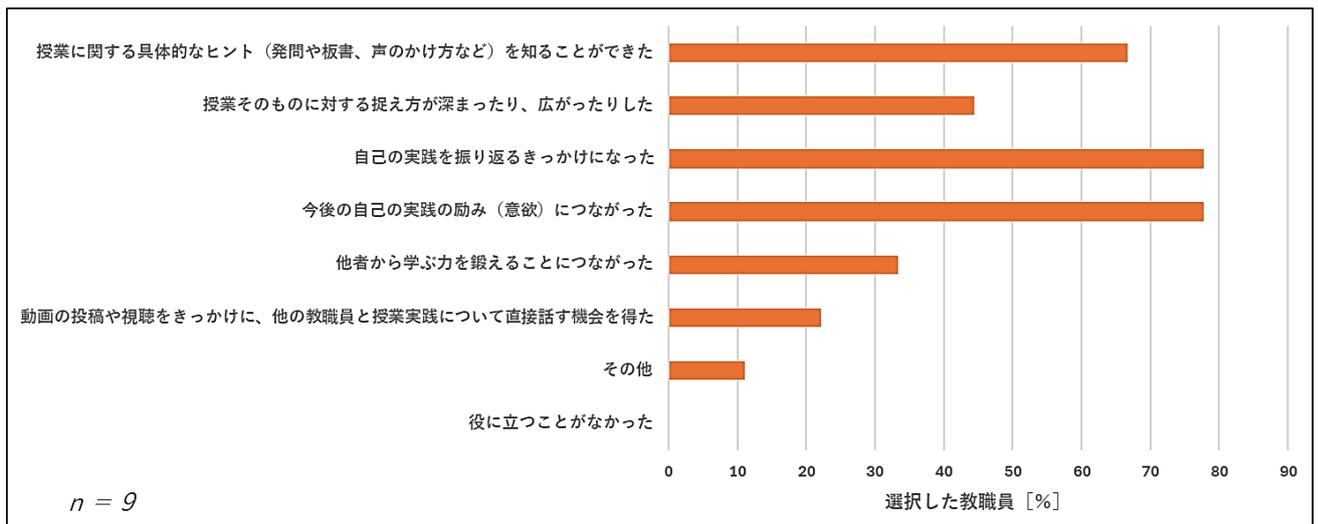


図2 どんな点で役に立ったか（動画投稿者）

た」で、約8割の教職員によって選択されている。もし、教職員が自己を振り返り、今後の新たな実践に意欲的になれたのなら、それは成果と言えるだろう。そして、これはまさに、学び続ける教職員の観点から、教職員研修が果たすべき役割の一つなのではないだろうか。

次に多く選択されたのが、選択肢「授業に関する具体的なヒント（発問や板書、声のかけ方など）を知ることができた」であった。これは、動画を視聴した教職員のコメントを文章として、明確にフィードバックしている効果と考えられる。参集型の公開授業の場合、授業を参観した教職員一人ひとりの考えを授業者に明確にフィードバックすることは難しく、このことは、オンラインサイトを活用した授業実践交流の可能性と見ることができよう。

4番目に多く選択されたのが、選択肢「授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりした」であった。一部の教職員にとっては、具体的な授業のヒントのみならず、一步踏み込んだ、授業のフレームワークのようなものを刺激され、思考を深めたり広げたりする機会になったことがうかがえる。

以上のことを考慮すると、今回、授業実践の動画を投稿した多くの教職員が、「授業ラボおかやま」の活用を通して、具体的な指導技術のヒントを得るとともに、自己の実践を省察し、改めて、日々の実践へ意欲的に戻っていく姿が想像された。日々の実践は、教職員の研究と修養の場であり、「授業ラボおかやま」という研修の場が、日々の研修の場と有機的に結びついていっているのではないかと考察される。このことは、独立行政法人教職員支援機構（2024）において、「日常の実践の合間に、少し立ち止まって、自身の教育実践の特徴や考えの枠組み、自己の『在り方』を考え、気づきを得た結果、その気づきが契機となって、新しい実践を生み出せるようになったり、子供の見え方が変わったりすることは十分考えられ、教職員研修には、このような契機を創り出せる可能性がある」（13頁）と指摘していることとも一致する。

なお、図2のデータ及び分析は今回の動画投稿者の声を純粹に整理したものであり、一般的傾向まで規定したものではない。

## （2）コメント投稿者の学び

一方で、動画を視聴しコメントを投稿してくれた教職員・指導主事（以下、「教職員等」と呼ぶ。）は、どのように、「授業ラボおかやま」を捉えたのであろうか。「授業ラボおかやま」開始後、初めての動画投稿ということもあり、まだ十分に認知されていないことから、コメント投稿者も限定的ではあるが、今後の参考として、コメント投稿者側の意識も併せて分析しておきたい。

表1 自己の授業実践のために役に立ったか（コメント投稿者）

		授業実践動画								
		A	B	C	D	E	F	G	H	I
授業ラボの活用は、自己の授業実践のために役に立ったと思う。最も当てはまるものを1つ選択してください。（4件法）	とても当てはまる	60	20	57	40	50	25	40	20	40
	当てはまる	40	80	43	60	33	75	60	80	60
	あまり当てはまらない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	全く当てはまらない	0	0	0	0	17	0	0	0	0

A(n=5), B(n=5), C(n=7), D(n=5), E(n=6), F(n=4), G(n=5), H(n=5), I(n=5)

※数字は選択した教職員数 [%]

調査内容「授業ラボの活用は、自己の授業実践のために役に立ったと思う。最も当てはまるものを一つ選択してください。」について結果を集計したものが、表1である。

表1によれば、授業実践動画Eにおいて、「全く当てはまらない」を選択した者がいるものの、全体を見ると多くの教職員等が肯定的に回答している。このことについて、正確二項検定（両側検定）による検証を行い、A（ $p=.06$ ）、B（ $p=.06$ ）、C（ $p=.016$ ）、D（ $p=.06$ ）、E（ $p=.219$ ）、F（ $p=.063$ ）、G（ $p=.06$ ）、H（ $p=.06$ ）、I（ $p=.06$ ）という結果を得た。動画Cについては、有意水準（5%）を下回っていることから有意な傾向が確認された。つまり、統計的にも動画が授業実践のために役立ったと言える。自由意志のもとにコメントを投稿した教職員等であるという前提があるが、少なくとも、そのような教職員等にとっては、その動画を視聴し、コメントをすることからも学びが得られたことがわかる。ただし、その他の動画については、同様の傾向が見られるものの、データ数が極端に少ないことから、統計的に有意な傾向は確認されておらず、今後、サンプルサイズを上げて継続調査を行う必要がある。

では、今回のコメント投稿者にはどのような学びがあったのであろうか。調査内容「どんな点で役に立ったか」について質問し集計したものが、表2である。表2では、授業実践動画AからI、それぞれでアンケートを実施し割合を算出している。表2において、50%以上、つまり、半数以上の教職員が選択したものを分析してみた。すると、選択肢「授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりした」が、9本中7本の動画で、半数以上の教職員に選択されており、最多であった。次いで、選択肢「自己の実践を振り返るきっかけになった」が5本の動画で半数を超えており2位、そして、選択肢「授業に関する具体的なヒント（発問や板書、声のかけ方など）を知ることができた」と「今後の自己の実践の励み（意欲）につながった」が4本の動画で半数を超えており、同率で3位で

表2 どんな点で役に立ったか（コメント投稿者）

	授業実践動画								
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
授業に関する具体的なヒント（発問や板書、声のかけ方など）を知ることができた	80	60	43	40	50	50	40	20	20
授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりした	40	60	57	80	67	50	80	40	80
自己の実践を振り返るきっかけになった	40	40	71	60	67	50	60	20	40
今後の自己の実践の励み（意欲）につながった	60	20	57	20	50	25	20	60	20
他者から学ぶ力を鍛えることにつながった	40	20	57	60	17	25	20	40	40
動画の投稿や視聴をきっかけに、他の教職員と授業実践について直接話す機会を得た	20	0	43	0	0	0	20	0	40
その他	20	20	0	0	0	25	20	0	0
役に立つことがなかった	0	0	0	0	17	0	0	0	0

A(n=5), B(n=5), C(n=7), D(n=5), E(n=6), F(n=4), G(n=5), H(n=5), I(n=5)

※数字は選択した教職員数 [%]

あった。さらに、選択肢「他者から学ぶ力を鍛えることにつながった」が2本の動画で半数を超えていた。

選択肢「授業に関する具体的なヒント（発問や板書、声のかけ方など）を知ることができた」や「自己の実践を振り返るきっかけになった」、「今後の自己の実践の励み（意欲）につながった」は、動画投稿者の学びにも見られたものであり、同様な学びが双方にあることが示唆された。特に、自己の実践にコメントをもらった訳ではない、コメント投稿者が、今後の実践の意欲につながったと回答していることは、研修の可能性を感じさせるものである。

そして、最も注目すべきは、非常に多くの動画で、選択肢「授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりした」が選ばれていることであろう。この学びは、先ほどと同様に動画投稿者にも見られた学びであったが、動画投稿者に比べて非常に高い出現率と言える。他者の授業実践を視聴しコメントを記入する過程において、自分とは異なる授業者の視点に触れ、授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりする効果があったことが推察される。

なお、表2のデータ及び分析は今回のコメント投稿者の声を純粋に整理したものであり、一般的傾向まで規定したものではない。

## 5. 総合考察

今回、授業実践動画交流サイトである「授業ラボおかやま」を活用した教職員等にアンケートを実施し、その学びについて整理、分析を行った。整理、分析を行う中で、授業実践動画投稿者もコメント投稿者も双方、「授業ラボおかやま」の活用が役に立ったと感じている様子がうかがわれ、主に三つのことが見いだされた。

一つ目は、授業実践動画投稿者に関し、「授業ラボおかやま」の活用を通して、具体的な指導技術のヒントとともに、自己の実践を省察した上で、改めて、日々の実践へ意欲的に戻っていく姿が示唆されたことである。日々の実践は、教職員の研究と修養の場であり、「授業ラボおかやま」という特別な研修の場が、日々の研修の場と有機的に結びついていっているのではないかと考察された。授業実践のための具体的なヒントを得られたことに関しては、動画を視聴した教職員のコメントを文章として、明確にフィードバックしている効果と考えられ、オンラインサイトを活用した授業実践交流の可能性と見ることができるだろう。

二つ目は、コメント投稿者についてである。コメント投稿者にとっても、授業実践動画投稿者に関して先述したようなものと同様な学びが見られた。学びの過程は、授業実践投稿者とは異なることが想像されるが、結果として、コメントを投稿する側にとっても学びがあることが示唆された。特に、自己の実践にコメントをもらった訳ではないコメント投稿者が、今後の実践の意欲につながったと回答していることは、研修の可能性を感じさせるものであった。

そして三つ目は、非常に多くのコメント投稿者が、授業そのものに対する捉え方が深まったり、広がったりしたと感じていることである。ただ視聴するだけではなく、他者の視点に触れた後に、コメントを書くことで、自分の考えやこれまでの実践を省察する機会を得たと考察される。

なお、今回の調査は、「授業ラボおかやま」運用開始直後の参加者に対する限定的な研究であり、一般的傾向まで規定し得るものではない。また、社会的構成主義の視点から言えば、「授業ラボおかやま」が提供するものと参加者との相互作用で学びが変化することが想像される。今後、「授業ラボおかやま」を介した学びのコミュニティが広がることを踏まえ、形成的な分析や評価が必要になると考えている。また、本稿では論じなかったが、オンラインサイトを活用した授業実践交流については、運用上の課題も散見される。

ただ、オンラインサイトを活用した授業実践交流について、その学びを整理できたことは、今後の参考として価値あることと言えよう。また、参集型公開授業には、その研修ならではの良さがある。二項対立で考えるのではなく、今回、見いだされた可能性を生かし、双方の良さを生かしつつ、研修の充実について模索し続けたい。

授業実践動画交流サイト  
(授業ラボおかやま)

動画投稿

コメント投稿

もっと自由に!  
もっと楽しく!  
授業力を磨こう!

2025年度・新規プロジェクト  
授業動画投稿募集  
オンラインでの学び

動画募集・コメント投稿

毎年、各学校や地区では、公開授業を伴う研修が行われます。しかし、参加者や、協議時間が物理的に限られるという問題がどうしても発生します。それでは、せっかく挑戦したのにもったいないですね。そこで、導入や展開部分などの一部を撮影した動画や、授業全体を短く編集した動画を、県内の教職員で見合い、成長のきっかけとなるコメントをもらうのはいかがでしょうか。もちろん、個人が日々の実践を投稿することも可能です。

POINT 1 / 研修支援と連動  
岡山県総合教育センターの研修支援と併せて行うことで、より多角的な意見を受け取れます。

POINT 2 / 時間を有効活用  
動画は1か月程度公開されるので、自分のタイミングで視聴、コメントすることが可能です。

POINT 3 / コメントする側も成長  
授業を投稿した人はもちろん、授業を視聴しコメントした人にとっても成長の場となります。

対象 県内公立学校の教職員（岡山市を除く）

募集期間

【 第Ⅰ期 】	動画募集	令和7年 5月12日	～	令和7年 7月15日
	コメント	令和7年 7月22日	～	令和7年 8月31日
【 第Ⅱ期 】	動画募集	令和7年 9月 1日	～	令和7年12月 5日
	コメント	令和7年12月15日	～	令和8年 1月30日

※チラシの作成には、Canva を活用した。

## 謝辞

「授業ラボおかやま」を積極的にご活用いただいた教職員の皆様と調査に御協力いただいた教職員の皆様、そして共に「授業ラボおかやま」の企画・立案・運営に関わってくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

中央教育審議会（2022）『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）』。

中央教育審議会（2021）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』。

独立行政法人教職員支援機構（2024）『『研修観の転換』に向けた NITS からの提案（第一次）～豊かな気づきの醸成～』。

IRIS Connect 「IRIS Connect | CPD & Professional Development For Teachers」  
<https://www.irisconnect.com/uk/>（2025. 8. 22 閲覧）。

宮崎県教育研修センター「チャレンジ ICT」<https://mkkc.miyazaki-c.ed.jp/page-7878-2/>  
（2025. 8. 22 閲覧）。

鈴木真理子・永田智子・西森年寿・望月俊男・笠井俊信・中原淳（2006）「Web ベース授業研究支援『eLESSER』プログラムの開発」『日本教育工学会論文誌』30（Suppl.）pp. 49-52.

高井良健一（2019）「第6章 教師の学び、教師の省察と成長」金井香里・佐藤英二・岩田一正・高井良健一著『子どもと教師のためのカリキュラム論』成文堂 pp. 133-151.

令和8年3月

岡山県総合教育センター

オンラインサイトを活用した授業実践交流の可能性  
—授業実践動画交流サイト「授業ラボおかやま」の取組を通して—